

旧石器時代のヒトとくらし

とっておきの埋文講座②

魚津歴史民俗博物館 館長 麻柄 一志

はじめに

人類はアフリカで約7百万年前に誕生したとされていますが、道具としての石器の使用はかなり遅れて3百数十万年前になってからです。考古学は人類の物質文化を扱っているので、考古学者の人類史への関与は石や骨、木などを加工して道具を利用し始めた3百数十万年前以降の歴史となります。その中でも大半の時間を占めるのが農耕や定住が始まる以前の旧石器時代です。旧石器時代を含めた初期人類の研究は、考古学、形質人類学、遺伝子学、環境学、地質学、民俗学などの様々な分野の研究の統合によって進められてきました。近年ジャーナリズムから最も注目されているのが、生物学的(遺伝子)進化研究ではないでしょうか。

ミトコンドリアDNAの解析から現代人のアフリカ起源説が提唱され、30年余りになりますが、その後の遺伝子研究はどんどん新しい解明が行われ、新説が提唱されています。DNAの解析から私たちアジアの現代人には数パーセントのネアンデルタールとデニソワ(デニソワ人)の遺伝子が残っていたことが明らかにされ、形質人類学の成果と併せて、従来議論百出だったホモ・サピエンスの出現から拡散の道筋が年代

と共に提示されました。旧石器時代研究の王道と自負していた私たちの考古学的手法はやや色あせた感があります。

昨年夏にシベリアのアルタイ地方の旧石器時代の遺跡を巡検しました。その一つのデニソワ洞窟は現在も発掘調査が進行中で、調査状況と出土遺物を見学することができました。この洞窟からは約20万年前から3万年前までの大量の石器や装身具、人骨が出土しています。人骨は断片的なものばかりで、外見を復元できるような良好な骨は残っていませんが、DNA分析が行われており、ネアンデルタールや第三の人類と呼ばれるデニソワ人が発見されました。デニソワ人はDNAだけの存在ですが、中国でも最近出土した化石人骨のDNA分析からデニソワ人が見つかっています。デニソワ人の重要性は、我々アジアのホモ・サピエンスは数パーセントの割合でネアンデルタールと共にデニソワ人の遺伝子も受け継いでいることが明らかになっており、私たちの祖先を考える場合、避けて通れないホモ属だということです。

昨年秋にはこのデニソワ洞窟から驚くべきニュースが飛び込んできました。この洞窟から出土した若い女性と考えられる人骨が、DNA分析で母がネアンデルタール、父がデニソワ人の混血第一世代であることが明らかにされまし

た。約10万年前にデニソワ洞窟に暮らしていたこの人骨は、日本のある県の知事と同じデニーの愛称で呼ばれています。デニーやその兄弟又は姉妹が我々アジアのホモ・サピエンスにネアンデルタールとデニソワ人の遺伝子をもたらしたのかもしれませんが。これまでの伝統的研究方法ではとても解明できないことです。

シベリアからアジアにホモ・サピエンスが進出以前に生息していたといわれるデンソワ(デニソワ人)はDNAだけの存在です。我々の祖先がどのような形態でどのような暮らしであったかは、やはり形質人類学と考古学抜きでは語ることはできません。

デニソワ洞窟の発掘調査は細かく細分された地層ごとに石器や装身具が取り上げられており、それぞれの地層の年代測定が行われています。地層ごとの人骨や石器の形態、装身具の存在などから、その変遷をさぐるができます。我々ホモ・サピエンスの祖先がアジアに到達した過程やそこで先住のネアンデルタールとデニソワ人とのように接触したのかが、この洞窟の出土資料から解明されるかもしれません。そうした期待を与えることができる遺跡だと思いました。

私に与えられた演題は「ヒトとくらし」ですが、「ヒト」は人類学や遺伝子学の



シベリア・デニソワ洞窟



デニソワ洞窟の発掘風景

のような竪穴住居は半定住社会になって初めて出現しました。

富山平野の遺跡から探る

富山平野にはこれまでの調査で160ヶ所の旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が確認されています。4万年以前の中期旧石器時代と考えられる1遺跡を除き、残りは全て3万8千年前～1万6千年前の後期旧石器時代と1万6千年前～1万1千年前の縄文時代草創期のものです。これらの遺跡から出土した石器群は石器の形態や製作技術から幾つかのグループに分類することができます。後期旧石器時代の前葉では小型石器と局部磨製石斧が特徴の立野ヶ原石器群が存在していますが、この石器群は山陰から北海道にかけての日本海側に分布しています。

3万年前以降になると近畿・瀬戸内地方で盛んに作られた横長剥片の国府石器群やその影響下で成立した瀬戸内系石器群が北陸地方から東北地方南部日本海側に分布しています。この石器群は素材に安山岩を用いる特徴があります。近畿・瀬戸内地方ではサヌカイトと呼ばれる石器を作るのに適した良質の安山岩が産出し、旧石器時代から弥生時代まで、石器の材料の主体となっています。北陸地方にも安山岩は広く分布しますが、伝統的には地元で採れる石材としてはメノウや鉄石英(碧玉)を石器の材料としています。近畿・瀬戸内地方で使われた技術で石器製作が始まると同時に石材も安山岩に替るので、この石器を作った集団は近畿に出自を持つグループとその末裔と考えられています。ほぼ同時期に東北地方の石刃石器群を製作したグループが東北産の珪質頁岩を携えて北陸まで南下しており、関東地方の集団とも繋がりが

ある石器も出土しています。

さらに時代が下って旧石器時代の終末期には北海道から細石刃石器群が本州に渡ってきました。そのグループは日本海側に沿って北陸を経由して山陰地方にまで到達しています。富山平野にも細石刃石器群が出土していますが、北海道からの移住者たちの遺跡と考えられています。瀬戸内系の集団はその後在地化しますが、その他の集団は入れ替わり立ち代わり北陸にやってきたようです。

石器の材料となった石材の産地分析からも遠くから移動してきたことがわかります。富山平野で見つかっている石刃石器群は東北南部日本海側から新潟県北部で採取できる珪質頁岩が使われています。珪質頁岩の原石や石刃を剥離した石核はあまり出土しておらず、東北地方等の頁岩産地で石刃を剥離し、その石器を北陸まで持ち込んだと考えられています。

岐阜県の下呂で採れる下呂石を素材とした石器も出土しています。これらは神通川や庄川を移動ルートとした人の移動を示していると理解できます。

石器を持つ移動がもっとよくわかる遺跡があります。南砺市立野ヶ原遺跡群の立美遺跡です。立美遺跡の発掘調査では約1千点の石器が出土していますが、その90%近くが良質な黒曜岩です。黒曜岩は火山ガラスで、火山列島である日本列島の各地に産出しますが、その成分がそれぞれ微妙に異なっており、蛍光X線分析で産地を推定することができますようになりました。調査が行われていた時点では長野県の和田峠の黒曜岩と考えていましたが、蛍光X線分析では青森県の深浦のものだと判定されました。深浦から立美遺跡まで直線距離で600km以上、旧石器時代の移動距離としては長すぎると思いまし



立美遺跡出土の黒曜岩製石器



たが、その後の全国的な調査で旧石器時代の終末期にはかなりの距離を移動している例が多数あることがわかりました。特に深浦の黒曜岩は関東地方、東海地方、北陸地方などの遠隔地まで運ばれています。黒曜岩は産地の推定が比較的容易なのでこのように分かり易いのですが、おそらくほかの石材でも長距離を運ばれた可能性があります。旧石器時代の生活は狩猟のための遊動生活だったと考えられています。それを裏付けるように、富山平野の旧石器時代遺跡の出土遺物分析でも、旧石器人が遠くまで活動領域を広げていたことがわかりました。

大陸の遺跡のように狩猟で獲られた大量の動物骨が出てくれば具体的な食料や狩猟の実態も判明するのですが、日本列島のほとんどの旧石器時代の遺跡からは石器しか出土しません。研究手段が限られていますが、旧石器時代の石器の石材を調べるという考古学的手法で当時のヒトの行動範囲を明らかにすることができます。また、石器の形態や製作技術の比較研究で集団の広がりや集団間の関係にも言及することができます。まだまだ、考古学者の存在価値は衰えていないと自負しています。



立野ヶ原石器群(西原C遺跡)



瀬戸内系石器群(直坂II遺跡)

先生方の成果を紹介するしかないのですが、本来考古学が解き明かさなければならぬ「くらし」についても考古学的研究で得られた証拠だけでは確信をもって断言できないのが現状です。

旧石器時代の「衣・食・住」

「くらし」といえば「衣・食・住」を連想しますが、この衣食住が旧石器時代の研究ではよくわかりません。よく、漫画には半裸体の石器時代の人々が描かれていますが、日本列島で遺跡が沢山発見されている3万8千年前から1万6千年前の後期旧石器時代は氷河期です。現在より平均気温がかなり低かったと考えられており、現在の私達より防寒具を揃えていたはずです。残念ながら旧石器時代の衣服の出土例はありません。昨年末に京都で開催された国際学会において、中央アジアで出土した旧石器時代の人骨の足の指の骨の研究で、靴のようなものを履いていた可能性が高いと指摘されていました。

日本列島に住んでいた後期旧石器時代人もおそらく毛皮で作った靴を履き、毛皮や樹皮、魚皮、植物繊維などで作られた衣服を着用していたと考えられています。毛皮の使用は、毛皮なめしに使われる搔器と呼ばれる石器が多数出土することや、中国の後期旧石器時代の遺跡から骨製の針が出土していることなどから毛皮製の服が存在したと考えられています。

何を食べていたかについてもよく分かっていません。旧石器時代は狩猟・採集の遊動生活と考えられており、狩猟具と考えられる石器が出土することから食料の多くは動物と思われます。ユーラシアでは遺跡の調査で石器と共に動物骨が出土する場合があります、具体的にどんな動物を狩りしていたのかが想像できますが、日本列島で動物骨が石器と一緒に出土している例は長野県野尻湖立ヶ鼻遺跡、岩手県花泉遺跡、青森県尻労安部洞窟など数例しかありません。

野尻湖湖底の立ヶ鼻遺跡からは少数の石器、骨器と一緒にナウマンゾウとオオツノジカの化石が多く出土しました。

そのほかヘラジカや中型動物のニホンジカやイノシシ、アナグマの化石などもあります。花泉遺跡からはヤギウ、オーロックス（原牛）、野牛の一種ハナイズミモリウシ、ヘラジカ、オオツノジカ、ナツメジカ、ナウマンゾウなどの化石骨が多量に出土しています。この2遺跡のデータを見れば日本列島の旧石器人はゾウやオオツノジカ、野牛などの大型動物を狩りしていたようにもみえますが、尻労安部洞窟からは大量のノウサギ属の骨が発見されています。そのほかムササビ、中型食肉目、カモシカ属、さらにはヒグマ、ヘラジカの歯なども出土していますが、圧倒的多数は小型動物です。ナウマンゾウのような大型動物ばかりでなく、遺跡周辺の動物相に応じ、ノウサギ類に特化した狩猟をおこなっていたのが尻労安部洞窟の旧石器人だったのでしょうか。このように遺跡の立地環境によって食料となる動物は異なっていたのでしょうか。

遺跡ではないのですが富山県内の2箇所、神通川の扇頂部の旧大沢野町長川原と庄川沿いの旧平村祖山です。長川原の対岸には直坂遺跡群が位置しており、祖山の下流の砺波平野奥部には立野ヶ原遺跡群が存在しています。ゾウは川沿いに移動するといわれており、これらの遺跡はそうしたゾウの集団を狙っていたキャンプだったかもしれません。

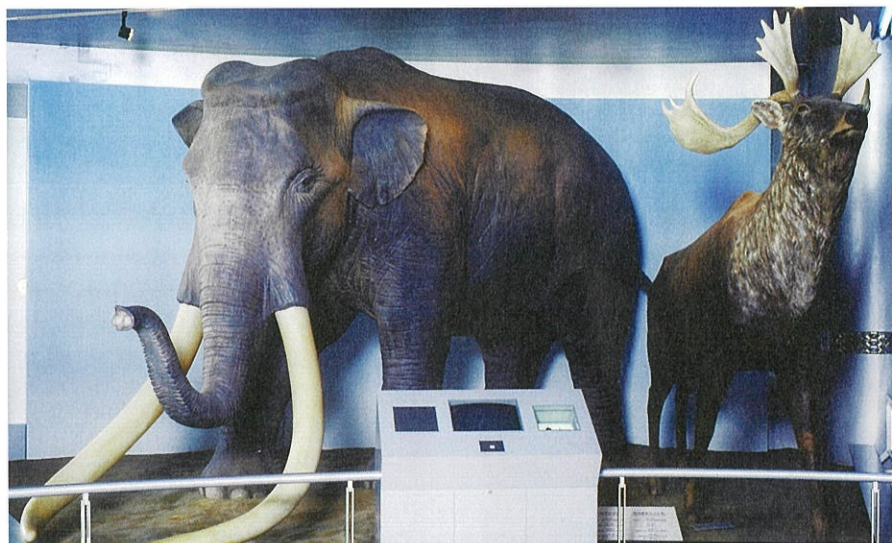
ゾウ1頭しとめれば、50人ほどの村人が1ヶ月近く食料に困らないという試算もあります。ただしナウマンゾウは約

3万年前に絶滅したと考えられており、後期旧石器時代の後半にはゾウに頼らない食料調達が必要でした。3万年を超える頃に石器の形態に変化がおとずれるのは動物相の変改に対応した狩猟方法の変化があったためかもしれません。

哺乳類のほかにも、爬虫類、魚類、昆虫さらにデンプンなどの植物質の食糧資源も利用されていたと想像されていますが、明確な証拠はありません。

住居についてもはなはだおぼつかない状況です。これまで旧石器時代の住居跡と報告されている例はいくつかありますが、解釈が分かれるところですが、シベリアではマンモスの骨を骨格にした住居跡が発掘されていますが、おそらくその上に毛皮などの覆いがあったものと思われます。日本列島にはナウマンゾウの骨の住居があったと想像できないこともないですが、日本列島で旧石器時代の住居といわれているのは神奈川県田名向山遺跡などで発見された柱穴状のピットが円形に並んでいる遺構です。円錐形のテントのようなものでしょうか。

富山平野では残念ながら住居跡と考えられる遺構は発見されていませんが、氷河期の寒冷気候の下で、防寒のための住居的な施設は必要です。洞窟や岩陰が利用された痕跡は稀ですので、狩猟を主とした遊動生活では持ち運びが簡単なテントのような住居が主流だったと思われます。おそらく、石器がまとまって出土するブロックの周辺にテント状の住居があったのでしょうか。縄文時代



ナウマンゾウとオオツノジカ

(魚津埋没林博物館提供)